

日高の会のこと

(1388) M/K

私には多分死ぬまで縁の切れないであろう仲間がいる。それは54年も前の出来事に関係がある。18歳の私はM大生になり、ワンダーフォーゲル部に入部した。中学時代から、山に登るようになり、山岳部に入りたいと考えていた。しかし家人の猛反対にあい断念したと云う次第。当時の総部員数は200名、現在の新津ハイキングクラブと同じ規模である。ただ女性の割合は2割を切っていたと記憶している。

その年、昭和37年の夏合宿は北海道と決定していた。7月下旬から8月中旬にかけての約3週間、前半は班別合宿、後半が全体合宿と決定していた。各班はそれぞれ、岬やら、半島やら山脈を越え、全体合宿地である、大雪山系化雲岳の麓に広がるヒサゴ沼の幕営地に集結する予定となっていた。私の所属する一班は日高山脈を西側（静内）から東側（帯広）に向かって横断して、班別合宿を終了し、新得からトムラウシ山を越えてヒサゴ沼の終結地に入る予定だった。

日高山脈は北海道にはめずらしく火山性の山脈ではなく、褶曲山脈であり、歴史は比較的新しく、従って谷は深くかつ急峻になっている。又北海道は緯度が高いために2000mに満たない山にも氷河時代の痕跡、カールが存在する。百名山の一つ幌尻岳はこの山脈のやや北端に位置しており、近年人気の高いカムイエクチカウシ山もこの山脈に属している。私達のパーティーが目指したのはその二つのピークの間位置する、エサオマントッタベツ岳（1902m）のピークだ。日高で登山道のある山は幌尻岳のみだがそれでも十数回の沢の渡渉を強いられると聞く。当クラブにも数名の百名山達成者がおられるので聞いてみるといいと思う。エサオマントッタベツ岳はもとより登山道はなく、新冠川をどこまでもさかのぼった先にあり、カール脇の稜線に出て這松を踏んでピークに至るというコース取りだ。現代のように沢登り用の靴や用具が無い時代、我々の装備の重要なものは地下足袋とワラジだった。

日高へは入ってから出るまでの予定は約一週間だったのだが台風9号が迫ってきていた。この年の日本列島は酷暑と言っているほどの夏が続いていたが、北上してくる台風は日本列島に接近出来ず、中国大陸を回って北海道に上陸してくるという珍しい進路をとった。沢を詰めて詰めて行くのが唯一、エサオマントッタベツへのルートなのだ。現代と違い5万分の1の地形図をたよりの山行。しかも過去に3例程しか記録の残されていないこの山を選んだ理由を当時のリーダーのIさんに聞いてみた。曰く、



写真1 半端でないザックの重み10日分の食糧とテント

人のあまり行かない山を選びたかった、学生の身分で時間の余裕のある今が挑戦する時と思った。又、サブリーダーのAさんやルートマネージメントを行う3年生、KさんとSさんの力量にも満足すべきものがあったからだという。それにしても青春時代の勢いの発露なのだろうか。とにかく沢歩きが始まったときから苦難の連続だった。何より、夏とはいえ北の国の沢水

は冷たく、流れも速い。長くは歩いていられない。ともすると流れに足をとられて転ぶ、ザックの重みが半端ない(なにしろ10日分くらいの食糧、とテントふた張り、今の材質と違って、ズックやサージといった生地なのだ)からなかなかひとりでは起き上がれないのだ。(写真1)

沢筋に日が差すのはほんの数時間しかなく、行動時間は著しく制約される。激しい雨に降られれば沢水が減水するまで動けない。それでもほぼ予定どおり7月30日にエサオマントッタベツ直下のカールの端にたどり着いた。途中は50mの滝を超えるのに1時間半かかったり、沢の出合でのルートマネージに時間取られたり、苦難の連続だった。翌日はカールの縁から稜線に出て這松の尾根を進み、マッターホルンのような立ち姿のエサオマントッタベツ岳のピーク(写真2)に立ったのだが、風雨がやまず停滞を余儀なくされる。その間も3年生のルートマネジメント活動は休むことなく続行されていた。



写真2 エサオマントッタベツ岳 1,902mのピーク

台風9号はあと3日もすればこのエリアに最接近してくるはずで、その情報は毎日の天気概況と天気図の作成によって班員にも知らされていた。後戻りはできない。帯広に向かって進むしかないのだが、前線の停滞と台風の接近はダブル効果で強い雨と風をもたらしていた。

この停滞中私たちは大変なものを目撃する。それはヒグマだ。カールの雪渓上に2頭いたのだ。我々がヒグマのすみかに侵入しているのだから会っても不思議ではないのだが、まさかここで会うとは。行動中は必ず二人ひと組でかつ、ホイッスルを鳴らせるようにして熊に我々の存在を知らせることを申し合わせていた。まじかにヒグマを見たのは、帯広側へのルートマネジメントに出かけていた3年生の二人だった。カールののぞける稜線の淵からカールをのぞきこんだらほんの50mくらいのところに親子熊がいたのだ。日本に住んでいる動物でもっとも大型で、かつ獰猛といわれるヒグマは走ると60キロメートルの速度が出るのだそうだ。とてもかなう相手ではない。早々にこの場を立ち去ることになり戸鶯別川に向かって下る。草付きの斜面にはあちこちに熊が草を噛んだあとや、糞が見える。2時間ほどで沢筋に到達しテントの張れるスペースを作り、先ずは一安心。台風の最接近は今夜半のようだ。上級生は避難ルートを山の斜面に設定し、ザイルを一本固定し台風の接近に備える。夜10時過ぎ、『起きろ』とどなり声。テントの外はもう沢水がすぐそこまで迫っている。あらかじめザックはパッキングしてあったので、テントをたたむと避難予定の斜面によじ登る。真夜中くらいだったろうか雨はいよいよ激しく降り出した。すると、沢筋の方からごろごろ、どしんどしん、ガラガラといった音も聞こえ出した。沢の兩岸の岩が鉄砲水で流されている音らしい。我々の要る場所は笹っ原の斜面なのでザックの上に腰をおろしているのだが、濡れた笹が滑るため安定しないことおびたしい。数人ずつでテントをかぶり、滑るザックに悪戦苦闘しながら朝を待つ。雨があがったころ朝になりテントサイトへ降りてみた。驚いた。兩岸にあった大小の岩が跡形も無くなっていたのだ。昨夜の鉄砲水が押し流したのだ。テント場は勿論水に洗われていた。台風一過の久しぶりの晴天に洗濯をしたり濡れた装備乾かす一日だった。

翌日は戸蔦別川に向かって下っていかねばならない。しかし西側斜面よりもこれから向かう東側斜面のほうが、函谷（写真3）になっている部分が多い。氷河の削った痕跡なので直接沢を歩くことはできず高巻きで乗り越えていくしかない。戸蔦別川に出て川の縁を腰まで水につかりながら歩く。川の真ん中では岩の流されるごろごろいう音が聞こえる。怖くて仕方がないが先輩の背中を見て歩くのみ。流されずに残った戸蔦別橋（写真4）についたときには、ほっとしたのと、嬉し泣きそうな心理状態だったと思う。

さて、この後は帯広へ出て、合同合宿地、大雪山系化雲岳山麓のヒサゴ沼に向かうのだがこの文章のタイトルからは外れるので割愛させていただくとこととして、何故日高の会が誕生したのかについて記してみたい。

当時の日高に入ったのはパーティーは4年生2名、3年生2名、2年生2名、我々1年生6名の12名、その他先発隊員として合同合宿地で登山道の補修や食糧、薪などの荷上げ作業に従事した2年生2名も我が一班の構成メンバーだった。昭和37年の日高合宿から30年ほどたったある日、当時のリーダーだったIさんと、3年生でルートマネジメントにあたったSさんがぱったり住まいのある駅で行きあったのだそうだ。二人とも大学卒業後は全国区のビジネスマンとなり、あちこち転勤を繰り返して今の住所に落ち着いていたのだそうだ。話はおのずと当時の思い出の日高山行のことになり、では一度集まろうかということになり、私のところにも連絡がきたということなのだ。当時は父親を亡くして落ち込んでいる頃だったので、日高のメンバーに再会するというのは心浮き立つ会合だった。以来約25年、毎年11月の2週目の日、月に温泉で一杯という懇親会を続けている。私は新潟から、サブリーダーだったHさんは仙台からそして東京や近県にいるメンバーは、当時1年生のK氏がワゴン車をレンタルして連れてくる。こんな会を続けているのは12個班あった当時のパーティーでも私達だけだという。当時のワングル部員の中には我々の会を大層うらやましがられているそうだ。私の青春時代の一コマではある。



写真3 氷河が削った函谷を高巻きで乗り越える



写真4 流されずに残った戸蔦別橋にて